

其他ポリゼル氏法、カテーテル法ヲ施シ一乃至二%沃度加里水ヲ「カテーテル」ニ依リテ注入シ又鼓膜按摩法ヲ施スヘク次テ電氣療法ヲ注意シテ持長スルヲ要ス其他ハ海濱、温泉等ノ氣候療法ヲ施行スヘシ  
ウルバンチツチュ氏ハ番木鱈越幾斯或ハ丁幾、臭素那篤留謨等ノ内服效ヲ奏スルコアルヲ説キハルトマン氏ハ「ザロール」ヲ賞用ス

第九章 迷路ノ骨瘍及ヒ骨疽

*Labyrinthes.*

*Caries und Necrosis des*

迷路ノ骨瘍  
及ヒ骨疽

〔原因〕結核、腺病、梅毒、急性傳染病(殊ニ猩紅疹、實扶的里等ニ由リテ發スルコト多ク又顚顚骨ノ骨疽或ハ近隣諸部ノ炎症ヨリ蔓延スルモノ少ナカラス  
此症ハ大人ニ於ケルヨリハ小兒ニ於テ遙ニ多ク男性ハ女性ヨリ多シ  
迷路ハ全體或ハ局部ニ壞疽ヲ起ス例之蝸牛殼、三半規管共ニ發生スルコトアリ或ハ蝸牛殼若クハ三半規管ノミニ發生スルコトアリ  
迷路中最モ多ク骨疽ニ罹リ易キハ蝸牛殼ニシテ其報告少ナカラス左ニチーム氏 *Zimm* ノ報

告セル二例ヲ示ス可シ

第一患者 男子 二十六歳 小使

二歳ニシテ麻疹ヲ患ヘタル後左右耳鳴トナリ屢、熱發シ劇烈ナル眩暈及ヒ顔面神經麻痺ヲ伴フ右方ハ悪性有臭ノ排膿及ヒ顆粒狀肉芽ヲ見ル又常ニ半頭痛アリ

聽力ハ呬語ニシテ時儀ニ對シテハ  $\frac{0}{200}$  ナリキ

或ル日突然右耳ヨリ骨疽性蝸牛殼ヲ出セシカ後右側持續性頭痛ハ消失シ排膿及ヒ顔面神經麻痺モ快復セリ然レモ聽力ハ依然  $\frac{0}{200}$  ナリシ

第二患者 男子 五十六歳

八歳ニシテ右耳漏ヲ患ヘ發病後二ヶ月ニシテ疼痛、顆粒狀肉芽、顔面神經麻痺症ヲ發シ次テ腐骨性蝸牛殼ヲ出ス十年ノ後排膿ハ止ミタレモ顔面神經麻痺依然トシテ癒エス聽力モ亦缺如セリ

迷路ノ壞疽ニ陥イリタル部ハ鼓室ノ迷路壁及ヒ聽道ヲ通シテ瀾蔓シ乳嘴突起或ハ鼻腔ニ穿孔スルコトアリ

〔症候〕甚タシキ聽力障害、顔面神經麻痺、眩暈、蹣跚タル歩行、耳鳴、疼痛、鼓室及ヒ乳嘴突



起ノ化膿性炎等ノ諸症狀ヲ發起ス

〔豫後〕ベツォルド氏ニ據レハ死亡數ハ二十%ナリト云フ多クハ腦ノ諸病若クハ竇靜脈炎ヲ喚起シテ斃レ易キモノトス

〔療法〕先ツ外聽道及ヒ鼓室ノ制腐法ヲ施シ肉芽組織ヲ搔爬シ、乳嘴突起ノ壞疽ヲ起ス者ハワイルド氏ノ截開ヲ施シ或ハ乳嘴突起ヲ穿開シテ壞疽セル骨片ヲ切除シ清淨ニ保ツヘシ

### 第十章 迷路ノ新生物 *Neubildungen des Labyrinthes.*

迷路ノ新生物ハ迷路ニ原發スルモノ甚タ少ナクシテ通常續發スルモノトス

結締織新生物ハシユワルゼ氏之ヲ前庭ニ、レウエク、ラソルス氏 *Léveque-Lassouré* 之ヲ内聽道口ニ發見セリ

ホルトリニー氏ハ蝸牛殼穹隆ニ於テ纖維筋腫ヲ、モース氏及ヒブルックハルド、マリアン氏 *Bruchardt-Marian* 等ハ前庭部ニ骨質新生及ヒ外骨腫ヲ、ポリセル氏ハ兩側蝸牛殼ニ癌腫ヲ、モース氏ハ梅毒腫ヲ、ハアベルマン氏ハ結核性腫瘍ヲ何レモ迷路内ニ於テ發見シ之ヲ報告セリ

### 第十一章 聽神經成形不能 *Bildungsanomalie des Nervus acusticus.*

聽神經ハ悉ク缺損シ若クハ成形不能ナルコアリ又一二ノ神經缺損若クハ成形不能ナルコアリワルサルワ氏ヒルト氏等ハ前庭神經及ヒ蝸牛殼神經ノ成形不能ヲ實驗セリト云フ

聽神經厚徑ノ變常 *Anomalie der Dicke* ニ就テ主要ナルモノハ削瘦トス

聽神經削瘦 *Atrophie des N. acusticus* 神經壓迫ニ原因シ或ハ神經ニ營養ヲ供給スヘキ血管ノ荒蕪スルキハ之ヲ發シ又同神經中樞部及ヒ末梢部ノ疾患ニ由リテモ削瘦スヘシ

ベツチェル氏 *Böttcher* ハ肉腫ノ爲メニ壓迫削瘦 *Druckatrophie* ヲ、ポリセル氏ハ頭蓋底ヨリ顛顚骨ニ及ホセル脈管腫ノ爲メニ聽神經及ヒ顔面神經ノ壓迫削瘦ヲ起セルモノヲ報告セリ  
グウル氏 *Gull* オグレエ氏 *Ogle* 及ヒグリーンゼンゲル氏 *Grisinger* 等ハ基礎動脈ノ動脈

瘤ノ爲メニ迷路及ヒ聽神經ノ動脈閉塞ヲ起シ以テ聽神經ノ削瘦セル者ヲ報告セリ  
中樞ノ疾患ノ爲メニ來ル削瘦ハ殊ニ延髓及ヒ小腦ノ疾病ニ於テ見ルコト多シモース氏ハ出血性硬腦膜炎ニ因スル聽神經削瘦ヲ記載セリ



エルブ氏ハ脊髓癆ニ由リテ聽神經削瘦ヲ發セシ者ヲ見タリト云フ  
 聽神經削瘦ハ聾啞ニ就テ頗ル多ク諸家ノ實驗報道セル所ナリ  
 ハアベルマン氏ハ蝸牛殼神經ノ局處削瘦ヲ記載セリ頗ル珍奇ナリトス  
 [療法] 第一、體質ニ於テ營養不良ノ者ニハ滋養強壯法ヲ施シ第二、他ノ疾病アル者ハ之カ  
 處置ヲナシ第三、内按摩法、電氣療法等ヲ施シ第四、強神變革劑ヲ投ス

聽神經炎

第十一章 聽神經炎 *Entzündung des N. acusticus.*

聽神經ノ炎症ニ罹ルキハ發赤、腫脹、出血、化膿、軟化等ヲ來シ遂ニハ變性スルモノトス  
 聽神經炎ハ原發シ或ハ頭蓋腔迷路ノ炎症ニ併發ス  
 又單純腦膜炎、腦脊髓膜炎等アルキハ聽神經炎ヲ來シ若クハ滲出物ニ由リテ聽神經ヲ壓迫  
 スルモノトス

モース氏ハ一患者ノ實扶的里後ニ聽神經炎ヲ起セシ者ヲ報道セリ  
 [療法] 身體ヲ安靜ニシテ精神ヲ和ラケ頭部ニ冰罨法ヲ施シ下劑ヲ投シテ腸管ニ誘導スヘ  
 シ

中樞性聽神經纖維障害

第十三章 中樞性聽神經纖維ノ障害 *Affection der centralen Acusticusfasern.*

聽神經中樞ハ腦ノ障害ニ由リテ他ノ諸中樞ニ比スルニ多ク共ニ侵サレ易キ位置ヲ占ムルモ  
 ノナリ即チ腦ノ種々ノ部分ニ腫瘍其他ノ變常アルキハ聽器ノ障害ヲ被ムルコト少ナカラス其  
 多少ニ就テハ諸家ノ調査一樣ナラスカルマイル氏 *Carnell* ハ腦腫瘍患者ノ九分一ハ聽神經  
 障害ヲ起スコヲ、レーベルト氏ハ四十五人ノ腦腫瘍患者中十一人ハ聽官障害ヲ、ラメ氏  
*Ladame* ハ七十七人ノ小腦腫瘍中七回、二十七人ノ腦中葉腫瘍中三人、聽官障害ヲ起シ 腦前  
 葉膿瘍二十七人、腦後葉十四人、斜方窩四人、何レモ聽官障害ヲ起サ、リシコトヲ各實驗調査  
 セラレタリ

基礎動脈動脈瘤

シユワルセ氏ハ腦腫瘍ニ由リテ腦萎縮ト共ニ馬鐙骨ノ關節癒著セル者ヲ屢々實驗セリト云フ  
 聽官障害ハ基礎動脈動脈瘤ニ由リテ發起シ易キモノニシテ且ツ頗ル多シト  
 基礎動脈動脈瘤診斷ノ要點ハグリーンジングル氏ハ左ノ如ク定メタリ即チ關節及ヒ泌尿ノ障  
 害、四肢ノ軟弱、癱瘓 *Paraplegie* (即チ橋部障害) 半身不隨、後頭部脈動等ナリト



ワルレントラップ氏 *Warrentapp* ハ五十一歳ノ婦人突然神思不和、後頭痛、耳鳴、難聴、四肢ノ震顫及ヒ軟弱ヲ起シ十三日ノ後死去セリ之ヲ解剖セシニ基礎動脈瘤ヲ起シ橋ヲ壓スルヲ見タリト云フ

レーベルト氏ハ耳聾ト舌咽神經障害即チ嚥下困難トヲ合併セル者及ヒ迷走神經麻痺ノ症候即チ呼吸困難、脈搏ノ變常等ヲ來ス者ヲ實驗シタリト云フ

卒中ト耳聾トノ關係ニ就テハ諸家ノ頗ル多ク報道セル所ナリモース氏ハ橋部ノ半側出血ニ於テ最モ多ク聽官障害ヲ起スヲ實驗セラレタリフエッテル氏ハ卒中ニ由リテ交叉性耳聾ヲ起セシ者ヲ報告セリ即チ左側水晶體核ノ前部及ヒ内胞ノ後部ニ出血竈アリシ者右側耳聾ヲ發セシト云フ又カウフマン氏ハ右側ノ腦出血ニ左側ノ耳聾ヲ發セシ者ヲ報告セリシユワルゼ氏、ポリゼル氏等ハ小腦ノ出血ニ就テ亦同様ノ報告ヲナセリ

急性腦水腫  
ウルバンチチュ氏ハ一患者急性腦水腫ニテ卒然耳聾及ヒ盲眼ヲ來セシ者ヲ剖檢セシニ二人共ニ聽神經幹ニハ變化ナカリシト云フ而シテ暫時性ノ盲眼及ヒ耳聾ハ一時水腫ヲ聽神經及ヒ視神經中樞ニ及ホスモノナルヘシト説明セリ

尿崩、血

尿崩症モ又稀ニ聽官障害ヲ來スモノナリ「ウルバンチチュ氏ハ血後聽神經麻痺ヲ起セシ

者ヲ報セリ

癲癇

デンテルト氏ビュルクテル氏等ハ癲癇ノ後耳聾ヲ發セシ者、ウルバンチチュ氏モ又癲癇ノ後聽神經麻痺ヲ起シ二年ノ後再ヒ癲癇發作アリテ益々難聴ヲ増進シタル者ヲ報セリ

癲狂

デルブリック氏 *Derbick* ハ癲狂者ノ暴狂發作後、聽官及ヒ語官ヲ失セル者再ヒ恢復セルヲ報セリ即チ二十歳ノ男子聽官及ヒ語官ノ機能障害ヲ來シ八日間右側耳鳴ヲ發シテ聽力恢復シ左側モ亦耳鳴進行ト共ニ聽力恢復セリト云フ

イタル氏ハ間歇熱ノ後ニ耳聾ヲ發セシ者ヲ報告セリ

間歇熱

ブライト氏病

ブライト氏病ニ聽神經麻痺ヲ續發セシ「ハチオエラフオイ氏、ピッソオト氏等之ヲ述ベタリ

猩紅疹

フオス氏ハ猩紅疹ノ後腎臟炎ヲ起シ難聴ヲ併發セル者ヲ實驗セリ

實扶的里

モース氏ハ實扶的里ニ由リテ耳聾ヲ起スヲ詳細ニ調査シ迷路ニ微菌ノ侵入セルモノタルヲ發見セリ

白血病ニ由リテ耳聾ヲ起セシ「ハペルリン氏 *Perrin* フリードレンデル氏、ポリセル氏、ゴッ

白血病

トスタイン氏、ブラウ氏、グラデニゴ氏等ノ報道セル所ナリ

血管運動神經ノ障害ニ由リテ聽神經中樞ニ障害ヲ及ホス「ハ殊ニ血管痙攣ニ於テ見ル所ニ

血管運動神經ノ障害

迷路ノ疾病



痙攣性耳聾

シテ半頭痛ニ兼テ聴力過敏若クハ麻痺ヲ來スモノナリ  
 痙攣性耳聾 *Motionskrankheit* ハシユマルツ氏チイムセン氏ダールバイ氏等之ヲ實驗セリウル  
 バンチツチユ氏ノ一患者ハ突然左耳高度ノ難聴、耳鳴、嗅覺、味覺及ヒ觸覺ノ消失等ヲ發シ次テ  
 視界黒斑 *Skotom* 及ヒ視力減弱ヲ來セリ依テ「アミールニトリット」ノ吸入ヲ施セシニ顔面  
 ノ右側著ルシク發赤シ左側モ亦稍、赤色ヲ呈セリト云フ同氏之ヲ説明シテ曰ク是レ恐ラク  
 ハ五官機能ノ障害ニ因スルモノニシテ五官ノ中樞ニ於テ血管痙攣ヲ起スニ由ルナルヘシト」  
 ノルリス氏ハ一患者痙攣性耳聾ニ罹リシ者二十一年後自然發症ノ消失セル者ヲ報セリ  
 藥物ニテハ煙草、嚼囉仿謨、規尼涅、撒里矢爾酸等ハ聴力障害ヲ起スモノニシテ殊ニ撒里矢  
 爾酸ハ聴力障害ト共ニ腦ノ刺戟症狀ヲ發起シ易クシテ即チ是等ノ藥物ハ皆腦症ト共ニ聴力  
 障害ヲ發起スルモノナリ

聾啞

聾啞 *Taubstummheit*

聽官ノ機能廢絶スルモノ之ヲ聾 *Taubheit* ト謂ヒ語官ノ機能廢絶スルモノ之ヲ啞 *Stumm-*

*heit* ト謂ヒ聽官及ヒ語官ノ機能共ニ廢絶スルモノ之ヲ聾啞 *Taubstummheit* ト謂フナリ  
 聾啞ニ二種アリ先天性聾啞 *angeborene Taubstummheit* 後天性聾啞 *erworbene Taubstummheit*  
 即チ是ナリ

七歳以下ニシテ聽官ノ疾病ニ罹リ聾トナリタル者ハ言語ノ發達尙ホ完全ナラサルヲ以テ啞  
 ヲ兼テ易ク十四五歳以上ノ者ニ於テハ聽官ノ機能ヲ失スルモ言語ノ發達既ニ完全ナルヲ以  
 テ語官ノ機能ヲ失フコナシトス

聾啞ハ歐洲ニ於テモ統計上各國種々ノ差等アリ例之瑞西ハ十萬人中二四五ニシテ和蘭ハ三  
 四ノ大差アルカ如シ今歐洲各國ノ統計調査ヲ左ニ示ス

歐洲各國聾啞統計表

國名	年調査ノ號	各國人口	聾啞者ノ數	男	女	男聾啞百人ニ付女聾啞ノ比例
瑞西	一八七〇	二六六九一四七	六五四四	二四五	—	—
澳太利	一八八〇	二二四四二四四	二八九五六	一三二	一五九三五	一三〇三
ウシガールン	一八八一	一五、四二〇三	一九八七四	二二七	一〇五八九	九八五
						八六



佛蘭西	撒遜	噠嗎	希臘	葡萄牙	希臘	那威	芬蘭	普魯士	瑞典	ウエルテムベルグ	エルサスロートリンゲン	バアデン
一八七六	一八八〇	一八八六	一八七九	一八七六	一八八一	一八八六	一八八〇	一八八〇	一八八〇	一八六二	一八七二	一八七二
三六九〇五七八	二九七二八〇五	一九六九〇三九	一六七九五五一	四一六一九八〇	五二七四八三六	四八六三四五〇	二〇六〇七八二	二七二七九二二	四五五六六六八	一七二〇七八	一五四九八七	一四一五六二
二二三九五	一七四七	二二五五	一〇八五	三三〇九	三九九三	四三八一	二〇九八	二七九四	四八三四	一九一〇	一七二四	一七八四
五八	五九	六四	六五	七五	七七	九〇	一〇三	一〇三	一〇六	一一一	一一一	一一三
二四六〇	九四一	六四五	一七九九	二六三	二五三	一〇二九	二八三	一五二六八	二六八一	一〇一九	九七七	九四二
九九三五	八〇六	六二〇	一三二〇	一八三〇	二二九	七九七	九一五	二二六六	二二五三	八九一	七四七	八四三
八七	八六	九五	七三	八七	九四	七七	七七	八三	八〇	八七	七六	八九

シヨットランド	伊太利	エングラントリアレス	西班牙	白耳義	和蘭	總數
一八八一	一八八一	一八八一	一八七七	一八七五	一八七九	
三九三三〇〇	二八四六一六一	二五九七四三九	一六六三三八四	五三三六一八五	三五七五〇八〇	二二六四六五四
二二四二	一五三〇〇	一三三九五	七六九	二二八〇	一一九九	一七六一五六
五七	五四	五一	四六	四三	三四	七九
一一四九	八七〇七	七一一	四六二五	二〇八	六二九	九三二二
九九三	六五九三	六八四	三〇〇四	一〇七二	五七〇	七六三二五
八六	七六	八七	六五	八九	九一	八二七

之ニ  
ヲ加フレハ全總計左ノ如シ

北亞米利加	一八八六	五〇一五五七三	三三八七六	六八	一八五六七	一五三二一	八二
マイエル氏ノ調査ニ據レハ聾啞ノ比例ハ一萬人中七、四ハルトマン氏ニ據レハ七、七七ナリト云フ	二七二八〇三二七	二二〇〇三四	七	一一〇七九	九一六六	八二七二	



土地ノ關係

土地ノ關係 聾啞ハ各國其數一樣ナラサルヲ右ノ表ニ示スカ如ク然リ殊ニ有名ナル聾啞生  
產地タル瑞西ノ連山ニ於テモカントン、アッペンツエル、ガルレン、グラルス、シウイツ等ニ  
ハ一萬人中八乃至十五人之ニ反シテホッホアルペン例之ベルンハ四十二、ルゼルンハ四十四、  
ワルリスハ四十九等ノ割合ナリトス

聾啞ノ平地ニ於ケルヨリハ連山ニ於テ多キ理ニ就テハ諸説アリ飲料水説、血族結婚説等是  
ナリ

瑞西連山ニ流行スル一奇病「クレチニスムス」 *Cretinismus* モ其原因未タ分明ナラサレモ古  
來飲料水ニ因スヘシト稱フル者多ク而シテ「クレチニスムス」ノ多キ土地殊ニ其家族ニ聾啞ノ  
亦多キヲ以テ觀レハ疑ヒテ飲料水ニ歸スルモ決シテ不當ナラサルカ如シ

「クレチニスムス」トハアルペン山近傍ニ限局シテ發スル所ノ奇病ニシテ甲状腺腫脹、  
頭骨内三角軟骨ノ化骨、鼻翼扁平廣濶、頭大、體軀矮小、精神痴呆等ノ諸症狀ヲ發ス  
アルペン連山地方ハ外人ノ居住スルヲ少ナク祖先以來固著ノ人民多ク且ツ常ニ他國トノ交  
通稀ナルヲ以テ血族結婚ノ已ムヲ得サルニ至ル者多シト是レ血族結婚説ノ起ル所以ナリ  
遺傳ノ關係 遺傳ハ先天性聾啞ニ非常ノ關係ヲ有スルモノタルハ既ニ諸家ノ稱フル所ニシ

遺傳ノ關係

テ二世三世ニ傳ヘ或ハ尙ホ末世ニ傳フヘシ又兩親ノ内一人聾啞ナルモ健全ノ兒ヲ生スルヲ  
往々之アリ予ハ夫、聾啞ニシテ妻、健全ナル者ノ間ニ四人ノ健全ナル兒ヲ擧ケタルヲ實驗セ  
リ又夫妻共ニ聾啞ニシテ健全ナル兒ヲ擧クルヲアリハルトマン氏ハ夫妻先天性聾啞ナル者  
五人ノ子ヲ生ミ四人ハ聾啞ノ女子ニシテ一人ハ健全ナル男子ナリシト云フ  
又ハルトマン氏ノ調査ニ據レハ聾啞八千三十七人ノ内十七對ノ夫妻聾啞者アリテ二十八人  
ノ兒ヲ擧ケシニ盡ク健全ニシテ一ノ聾啞ヲ出サス又二百六十七對ノ夫妻ハ妻ノ聾啞者ヨ  
リ四百二十七人ノ兒ヲ擧ケ内聾啞ハ僅ニ十一人ナリシト云フ

ワイルド氏ミグエ氏等ハ聾啞ハ父ヨリ遺傳スルヲ母ヨリスル者ヨリモ多シト唱ヘシカシマ  
ルツ氏カ撒遜ニテ調査セシ所ニ據レハ其差異ヲ見出ス能ハサリシト云フ  
クラメル氏ハ一家族十一人ノ兒女アリ内男六人女五人而シテ男六人ハ皆聾啞ニシテ女五人ハ  
之ニ反シテ完全ナル聽力ヲ有スル者及ヒ一家族八人ノ男女悉ク聾啞ナリシ者ヲ報告セリ  
父母ニ精神病、酒毒、過勞其他種々虛弱ナル状態アルハ子孫ニ聾啞ヲ遺スヲハ人ノ稱フル  
所ニシテ又吾人屢々實驗スルモノナリ

男女兩性ノ關係

男女兩性ノ關係 男性ハ女性ニ比シ聾啞多キハ既ニ諸家ノ實驗セル所ニシテ前記聾啞統計



年齢ノ關係

兩親年齢ノ關係

表ニ據ルモ埃太利ニテハ男百人ニ女八十二人、普魯士ニテハ男百人ニ女八十三人、佛蘭西ニテハ男百人ニ女八十七人、伊太利ニテハ男百人ニ女七十六人、北亞米利加ニテハ男百人ニ女八十二人ノ比例ナルカ如シハルトマン氏ハ男百人ニ就キ女八五、一人シマルツ氏ハ男百人ニ女八五、六人ナルヲ檢出シワイルド氏ハ先天性聾啞ニテハ男百人ニ就キ女七四、五人、後天性聾啞ニテハ男九十三人ニ付女九十六人ノ比例ナルヲ檢出セリト云フ

年齢ノ關係 ワイルド氏ハ五百三人ノ聾啞ニ就テ年齢ノ關係ヲ調査セシニ百二十人ハ二歳以内ニシテ殊ニ二歳ニ多ク百九人ハ三歳乃至四歳ノ間、七十六人ハ四歳三十八人ハ五歳、三十六人ハ六歳、三十二人ハ七歳、二十一人ハ八歳、十一人ハ九歳、十五人ハ十歳、三十三人ハ十歳乃至十五歳十二人ハ十五歳ノ後ニ發セリト云フ

兩親年齢ノ關係 兩親年齢ノ關係ニ就テ最モ初メニ記載セシハメニール氏ニシテ氏ハ其若年ノ親ニ聾啞ヲ生シ易ク就中父ノ若キヲハ母ノ若キヲヨリモ之ヲ生シ易ク母ノ若キ者ニ於テハ比較的此關係ヲ見ルヲ少ナシト云ヘリ

フエボンニウ氏ハ聾啞者ノ兩親ハ少ナクモ十分ノ七八三十歳前ニ於テノ出産者ニ見ルヲ多シト

兩親血族結婚ノ關係

兩親血族結婚ノ關係 兩親血族ノ結婚ニ由リテ生シタルノ兒ハ精神病、腺病、結核等ヲ發シ易キカ如ク聾啞ニ於テモ亦大ナル關係ヲ有スルモノナルヲハメニール氏マイエル氏等ノ既ニ詳述セル所ニシテ他國トノ交通甚タ少ナキ僻陬ノ地ニハ血族結婚行ハレ從テ聾啞ノ多キヲ以テモ之ヲ推知スルヲ得ヘシ

予ハ東京ニ於テ叔姪ノ夫妻四子ヲ擧ケ第一子第三子第四子聾啞ニシテ第二子獨リ健全ナル者ヲ實驗セリ

血族結婚ニ由リテ聾啞ヲ生スルヲハブージー氏ハ二五%ミトシニル氏ハ六%ハルトマン氏ハ八%ナルヲ檢出セリ

左ニ諸家ノ調査セル「プロセント」數ヲ畧表トシテ示スヘシ

血族結婚ニ因スル聾啞ノ%數

番號	調査人	地	名	年號	聾啞	血族結婚ニ由リテ生シタル聾啞	%數		
一	シヤツツアライ	ボ	ル	ド	ウ	一八五九	八九	二七	三〇、三







急性傳染病

營養障害  
耳病  
先天性及後天性聾啞ノ關係

一一、九%千八百七十四年ポムメルン、エルフルトノ調査ニテハ五四、五%ヲ示ス  
 急性傳染病 此關係ハ流行性腦脊髓膜炎ヲ除クモ尙ホ頗ル多クシテ  
 (a) 猩紅疹ハ千八百八十七年伊太利ノ調査ニテハ一、五%千八百八十六年ノルウエゲン  
 ニ於ケル調査ハ二七%ナリ是レ調査中ノ最モ多キ數ト最モ少ナキ數トヲ記セシモノ  
 ニシテ之ヲ加ヘテ二分スルモ尙ホ一四、二五%ナリトス  
 (b) 麻疹ハ千八百八十一年撒遜ニ於ケル調査七%ヲ示セリ  
 (c) 窒扶斯ハ千八百八十七年伊太利ノ調査ニ據レハ極些細ナル%ヨリ四七%ニ達スルヲ  
 見ル  
 (d) 實扶的里ハ%數ノ調査ヲ記セシモノナシト雖モ是レ亦時々報道ニ接スルモノトス  
 (e) 痘瘡、丹毒、流行性感冒、間歇熱、耳下腺炎其他ノ發疹病モ亦聾啞ノ原トナルコトアレモ  
 上記ノモノニ比スレハ其數少ナシトス  
 營養機ノ障害 即チ萎黃病、佝僂病、先天性梅毒等ノ者ヨリ聾啞ヲ來スコトアリ  
 固有ノ耳病 此關係ニ於テ最モ多キハ原發性迷路炎若クハ中耳炎等ナリトス  
 先天性聾啞及ヒ後天性聾啞ノ關係 先天性聾啞及ヒ後天性聾啞ノ多少ハ土地及ヒ調査セル

先天性及後天性聾啞ノ比較表

人ニ依テ一樣ナラス左ニ記スル表ハ能ク其關係ヲ知ルコトヲ得ヘシ

先天性及後天性聾啞ノ比較表

國名	年號	調査人	先天性	後天性
ポムメルン	一八七四ヨリ 一八七五	ウイヘルミ及 ハルトマン	五九二	一〇三二
エルフルト	一八七四ヨリ 一八七五	同上	一六八	九九
佛蘭西	一八七六	國調査	一六二七	五二六
撒遜	一八八〇	シマールツ	六三六	六四九
普魯士	一八八〇	國調査	九四六	七九六
エルランド	一八八一	同上	三〇九二	七五三
シヨットランド	一八八一	同上	一〇七六	一〇六四
ノルウエゲン	一八八六	ウツヘルマン	九三三	八八五
總數			三二〇九四	一六九四五

各國聾啞院ニ於ケル表

各國聾啞院ニ於ケル表



國名	年	號	調査人	先天性	後天性
バ ア デ ン	一八一		ヘー ヂ ン ゲ ル	一八一	二三四
ウ ユ ル デ ン ブ ル グ	一八一		同 上	二二七	一一一
埃 太 利	一八四			八三	四八〇
ル ー ド ウ イ ヒ ス ル ス ト	一八五		レ ム ツ ケ エ	二〇	三七
ノ ル ウ エ ゲ ン	一八五		ウ ツ ヘ ル マ ン	一三三	二〇四
以 太 利	一八七			七九八	四七一
總 數				二〇六〇	一五三七

右ノ表ニ由テ觀ルニ佛蘭西及ヒ撒遜等ノ調査ニ在テハ後天性聾啞ノ數先天性聾啞ノ數ニ超過スレモ全總數ニ就テ算スルキハ後天性聾啞ハ先天性聾啞ノ半ハニ過キス是ヲ以テ觀レハ少數ノ統計ニ頼リテ先天ノ聾啞ハ後天ノ聾啞ヨリ少ナシト説クカ如キハ過誤ナシト云フヘカラス

種々ノ先天性及ヒ後天性聾啞ト全聾トノ關係 聾啞必スシモ全聾ナルニアラス空氣傳達若

聾啞ト全聾トノ關係

クハ骨質傳達ノ尙ホ多少存在スル者アリ而シテ此關係ハ先天性聾啞ニ於ケルヨリハ後天性聾啞ニ於テ全聾トナル者多シ左ニ諸家ノ調査セルモノヲ「プロセント」數トシテ示ス可シ

聾啞ト全聾トノ%數

先天性及ヒ後天性聾啞ト全聾トノ%表

調査人	地名	先天性	先天性全聾	%數	後天性	後天性全聾	%數
トインビー	龍動	三三	一七	五九	九	九	七四
クラメル	?	二七	一〇	三七	一	一	七二
?	バアデン	六〇	二七	四五	三	一	八〇
ハルトマン	伯林	五	二	四七	九	八	五七
シマルツ	ドレスデン	三九	一四	二八	一	二	六二
レムツケエ	ルードウイヒスルスト	二〇	四	二〇	三	七	一八
ウツヘルマン	ノルウエゲン	一三	四	三三	一	六	三〇

其他ノ原因ニ就テハ先天性聾啞ハ胎兒腦膜炎、神經中樞及ヒ聽器各機關ノ成形異常等主ナルモノニシテ又毫モ確實ナル原因ヲ探求スル能ハサルコアリ後天性聾啞ハ腦中樞裝置、迷



病理解剖

路及ヒ傳音裝置等ノ種々ノ疾患即チ腦膜炎、腦脊髓膜炎、迷路ノ炎症等ニ由リテ來リ又急性諸傳染病殊ニ猩紅疹、麻疹、窒扶斯等ニ由リテ之ヲ來スモノナルヲ前記ノ如シ

**〔病理解剖〕**聾啞ノ解剖セラレタルモノハコッペンハアゲン府ノミギンド氏カ千八百九十二年四月調査セシ所ニ據レハ大凡百五十件ナリトス予ハ其主ナルモノヲ表トナシ左ニ示スヘシ

聾啞剖檢略表

番 號	發 見 人	年 號	中	耳	耳 內	耳 摘	要
一	メルゼンヌス	一六七九	砧骨缺亡			先天性聾、性及ヒ年齡不明	先天性聾、性及ヒ年齡不明
二	ボ子ト	一六七九	砧骨缺亡			先天性聾、性及ヒ年齡不明	先天性聾、性及ヒ年齡不明
三	バアイリ	一六七九	全小聽骨三分一大			先天性聾、男性、三歲	先天性聾、男性、三歲

四	モンヂニ	一七九一		前庭導水管著ルシク廣 濶、蝸牛殻一廻轉半	天性聾、男性、八歲 足蹠ノ損傷性壞疽ニテ 死ス
五	ハイト	一七九二		全迷路乾酪様物ヲ以テ 充填セラル、聽神經尋 常ヨリ狹小	先天性聾、男性、三十歲
六	アツケルマン	一八〇五		聽神經著ルシク大且ツ 硬及ヒ經過異常	後天性聾啞 肋膜炎ニテ斃ル
七	モンタイン	一八一九	小聽骨缺損、鼓室ハ粘 液ヲ以テ充タサル	迷路缺損	先天性聾、男性、衰乏ニ テ斃ル
八	マツケブラング	一八二六		前庭導水管著ルシク廣 濶、螺旋板發育不全	聾啞、女性、十五歲
九	同上	一八二六		前庭導水管甚タ廣濶	先天性聾、男性、十七 歲、姉ハ聾、母、精神病
一〇	同上	一八二七	馬鐙骨小ニシテ成形異 常	全迷路缺損、內聽道甚 タ狹小	先天性聾、男性、八歲、 姉妹聾啞



一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一
同上	同上	同上	同上	同上	マツケプラング	クロムフホレツ
一八三一	一八三〇	一八三〇	一八二九	一八二九	一八二九	一八二七
	小聽骨缺損、鼓室著ル シク狹小、歐氏管、鼓室 口閉塞					
	半規管部處々化骨ス	前庭導水管廣潤、半規 管狹小、蝸牛殼ハ一廻 轉中、前庭道廣潤	三廻轉ノ間壁缺損	前庭導水管廣潤、蝸牛 殼螺旋板及ヒ軸第一廻 轉ニ在リ、第二及ヒ第 三廻轉ノ間壁缺損	內聽道著ルシク狹小	三半規管、蝸牛殼ノ骨 壁甚タ薄ク胎兒ノ如シ
	半規管處々加爾基チ以 テ充填セラル				內半規管缺損	聾啞、性及ヒ年齡不明
	先天性聾、女性、十三歳 兄モ亦先天性聾	先天性聾、男性、九歳	先天性聾、男性、八歳	先天性聾、男性、十五歳	先天性聾、女性、十二歳	

一八	一九	二〇	二一
同上	同上	ダ ル リ ン プ ル	ダ ル テ ル
		一八三四	一八六四
	外聽道狹窄、鼓膜缺損、 小聽骨缺損	右骨鐙骨及ヒ卵圓窓癒 著、正圓窓缺損、左正 圓窓甚タ狹小	鼓室粘膜炎、正圓窓 ハ骨質閉塞、右鼓膜上
	前庭導水管廣潤、蝸牛 殼一廻轉中、骨軸短小、 前庭道廣潤、小柱缺損、 螺旋板痕跡ヲ止ム、右 側蝸牛殼第一及ヒ第二 廻轉ノ間開口	前庭導水管廣潤、蝸牛 殼一廻轉中	前庭導水管廣潤ニシテ 中等大ノ消息子ヲ通ス 可シ
	先天性聾、男性、十六 歳、兄モ亦聾啞	聾啞、性及ヒ年齡不明	先天性聾、女性、二十 七歳丹毒後壞疽ニ陥イ リテ斃レタル者



二二	モ ス	一八七六	皮膚甚々肥厚、全小聽骨癒著、左鼓膜牽縮、髓骨砧骨關節稍、運動シ其他ハ癒著ス	耳石及ヒ「コロロイド」體頗ル多シ	先天性聾、女性、二十九歳、結核及ヒ結核性腦膜炎ニテ斃ル
二三	バラトウ	一八八一	正圓窓膜著ルシク菲薄ニシテ能ク運動ス	コルチ氏機關缺損、聽神經處々削瘦、前庭神經ハ平常	先天性聾、男性、五十六歳、氣管枝肺炎ニテ斃ル
二四	ボリゼル	一八八二	砧骨長脚過長ニシテ中央屈折、馬鐙骨ハ結締組織ヲ以テ固著セラル右鼓膜癒痕様變性、砧骨體ハ結締組織ニ圍繞セラル、左鼓膜穿孔ス	聽線ノ發育不充分、左聽神經幹「ゲラチン」變性ス	先天性聾、男性、六十一歳、解剖上診斷、慢性腦水腫及ヒ慢性腹膜炎
二五	同上	一八八二			先天性聾、女性十一歳

診斷

〔診斷〕聾啞ノ診斷ハ一歳以下ノ小兒ニ於テハ通常頗ル困難ニシテ唯兩親乳母等ノ陳述ニ依賴スルカ若クハ鐘、喇叭、笛等ノ音ヲ發シテ其舉動ヲ察ス可キノミ

三歳以上ノ小兒ニ在テハ音又検査法ヲ施スニ之ニ感スルキハ稍、笑顔ヲ帶ヒ若シ感セサルキハ變常ヲ呈セサル等ヲ熟視シテ推察スヘキモノトス

年齢稍長セル者ニ於テハ附添人ニ就キ既往症ヲ詳細ニ尋問シ種々ノ手段ヲ盡シテ之ヲ検査セハ以テ確實ニ診斷スルヲ得ヘシ

聾、聾啞、失語症、難聽等ノ鑑別ハ頗ル緊要ナレハ宜シク一般ノ検査法ニ由リテ確實ニ診定スルヲ要ス又初生兒ノ失語症ニシテ聾ヲ兼テサル者ハ甚々稀有ニ屬スルモノナルハ豫メ了知セサル可ラス

豫後

〔豫後〕クラメル氏曰ク聾啞ノ治癒セシ者ナシ否此疾病ハ治癒スヘキモノニアラスト諸家合同一致此說ヲ繼續スル者多シ然ルニ維也納ノボリゼル氏及ヒコツペンハアゲンノミリンゴ氏等ハ治癒セシ患者ヲ報告セリ今左ニボリゼル氏ノ報告セル一例ヲ舉ケン

男兒、三歳

千八百六十二年ボリゼル氏ノ診察所ニ來リ治ヲ乞フ之ヲ檢スルニ聾啞ニシテ更ニ音



響ニ感セス

六歳ニシテ其母再ヒ携ヘ來リテ曰ク一年前ヨリ聽力徐々ニ恢復シテ今日ノ状態ニ至ルト之ヲ詳檢スルニ聽力尋常ニ言語ハ尙ホ不充分ニシテ不明ナリシ

ハルトマン氏ハ一女子先天性聾ナリシカ偶然聽力ヲ得耳邊ニ口ヲ接シテ談スルハ之ヲ聽取スルニ至リシモノヲ報セリ

予ハ兩親及ヒ他醫ノ先天性聾啞ト見做セシ二例ヲ治セシメタルヲアリ

已上ノ報告ニ據ルモ古來諸家ノ所説ノ如ク必ス放棄スヘキモノニアラサルヘシ殊ニ中耳ノ疾病ノ爲メニ聾啞トナリシ者ノ快癒セシ例ハ決シテ稀ナラス

ポリゼル氏ハ先天性聾啞ハ後天性聾啞ニ比スルニ豫後良ナリト云ヘリ

〔療法〕聾啞豫防法ニ種々アリ血族結婚禁止、父母ノ攝養、初生兒ノ保護、既發耳病治療法等是ナリ

血族結婚禁止ノ聾啞豫防ニ必用ナルハ前記種々ノ統計ニ據リテ察スヘク又血族結婚ノ惡弊少ナキ土地ニ聾啞ノ數少ナキヲ以テモ之ヲ證スルヲ得ヘシ

父母ノ攝養モ亦聾啞豫防ニ重大ノ關係アルモノニシテ飲酒過多、精神過勞等殊ニ注目スヘ

豫防法

療法

キノ點ナリトス

初生兒保護トハ初生兒養育中ノ保護ニシテ腦膜炎、急性傳染病等ニ侵襲セラレサラシムルニ在リ

既發ノ耳病治療法ハ殊ニ幼兒ニ於テ要用ナルモノニシテ幼兒若シ聽管ノ機能廢絶シテ聾ト

ナルハ必ス啞ヲ兼テ聾啞トナルヲ屢論スルカ如クナレハ幼兒ノ耳病ハ慎テ診斷治療

シ又既ニ聾啞ト診斷ヲ下セシ者モ可成的ニ之カ救濟ノ方法ヲ講究セサル可ラス何トナレハ聾

啞ト見做シタル患者ニシテ些細ノ療法ノ爲メニ恢復シ常人トナリタル例ハ往々之アレハナ

リ左ニローレル氏ノ報道セル一例ヲ舉ケン

一女子 五歳

千八百八十九年十二月ローレル氏ニ診ヲ乞フ

患者遺傳ノ記スヘキナク二歳ニシテ麻疹ヲ患ヘタル他、疾病ニ罹リシヲナシ然ルニ生來聾啞ニシテ一語ヲ發セシヲナシト之ヲ檢スルニ左右鼓膜高度ノ牽縮、歐氏管狹窄アリ

〔處置〕ポリゼル氏法及ヒ「カテーテル」通氣法、「ブーシー」用法



鼻咽腔ニ二%硝酸銀溶液塗布、鼻腔ニ沃度兒末撒布

沃度鐵舍利別、ホーレル氏水内服

食鹽水全身拭布

右ノ方法ヲ施ス<sub>1</sub>久シク千八百九十年五月一日再ヒ來ル

之ヲ檢スルニ圖ラサリキ二百「センチメートル」ノ高音ノ聽力ヲ得ルニ至レリト

幼兒ニシテ既ニ聾トナリ救治ノ道ナキ者ハ既ニ習ヒ得タル言語ヲ忘レサラシメンカ爲メニ

可成的談話ヲ多カラシムルヲ要ス幼兒聾トナル<sub>1</sub>ハ言語ヲ忘レ易ク爲メニ聾啞ニ陷イルモ

ノナル<sub>1</sub>既ニ屢、論述スル如クナレハナリ

教育法

諸般ノ試験ノ後、既ニ聾啞ト診定セル者ハ速ニ聾啞教育法 *Taustimmenunterricht* ヲ施ス<sub>1</sub>

必要ナリ

聾啞教育法ハ談話スル<sub>1</sub>能ハサル不具者ヲ教訓シテ滔々是非曲直ヲ演述スル<sub>1</sub>ヲ得セシム

ルノ方法ニシテ吾人ハ發明者タルペドロ、ボンス氏ニ對シテ深ク謝セサル可ラス

聾啞教育法ハ千五百七十年即チ今ヨリ三百三十七年前西班牙ノ「ベチヂクト」宗ノ大僧ペド

ロ、ボンス氏 *Benedictinerpater Pedro Ponce* ノ發見スル所ニシテ實ニ空前絶後ノ大事業ナリト

ス次テ千六百五十二年オツキスフオールドノワル

ダムノヨハン、コンラード、アムマン氏 *Johann Comra*

獨逸國ニ於テハ千七百七十七年ハイニツケ氏 *Heinrich* ライブ

設シ專ラ發語法 *Sprachmethode* ヲ以テ夥多ノ啞生ヲ教育セリ其法ハ聾啞者ヲシテ談話者ノ

發語状態ニ注意セシムルモノニシテ最良ノ方法トナス所謂獨逸法是ナリ余ハ獨逸ニ在リシ

時一啞生ノ能ク此法ヲ習熟シ其談話辨識殆ト常人ト異ナル所ナキ者ヲ見タリ

佛蘭西ニ於テハ千七百七十八年アベ、ド、レベエ氏 *Abbe de l'Epée* 巴里ニ於テ始メテ聾啞

院ヲ建設シ專ラ示指法 *Dactylogie* ヲ以テ夥多ノ啞生ヲ教育セリ其方法ハ指ヲ以テ種々ノ

形容ヲナシ之ヲ理解セシムルノ方法ニシテ所謂佛蘭西法是ナリ

獨逸法即チ發語法及ヒ佛蘭西法即チ示指法ノ優劣ニ就テハ屢、諸家ノ論究セル所ニシテ甲

法ハ之ヲ習熟スレハ何人ト雖モ談話スルヲ得ヘク乙法ハ其教師若クハ示指法ノ規則ヲ知ル

ノ人ニアラサレハ理解スル<sub>1</sub>能ハサルモノトス千八百八十年マイランドニ開キシ萬國耳科

學兼聾啞學會ニ於テハ既ニ甲法ノ優レル<sub>1</sub>ヲ證認セリ故ニ今日ニ於テハ佛蘭西ニ於テモ亦

甲法ヲ用キル者多シトス

千六百九十二年アムステル

語法ヲ講セリ



聾啞ハ七歳ヨリ規則正シク教育シ而ノ可成の數多ノ健康人ト混居セシメ言語ヲ多カラシムルヲ要ス又日々習得セル所ハ介者亦其方法ヲ習得シテ屢復習セシムルヲ良トス故ニ常ニ聾啞者ト同居スルハ復習ノ途ヲ缺クヲ以テ宜シカラストス

ウルバンチツチ<sup>ユ</sup>氏ハ聾啞教育中ニ平流電氣ヲ通シテ效多キヲ説ケリ又語管ヲ用キテ屢談話スルキハ往々其效用ヲ助クルモノナリト云フ

訂改  
耳  
科  
學  
下  
大尾

第一版 明治二十七年四月十八日發行  
 第二版 明治三十一年十一月四日發行

版權所有

正價金八拾錢

著者 金杉英五郎  
 東京市神田區駿河臺南甲賀町十二番地

發行者 大柴四郎  
 東京市神田區鍛冶町二十二番地

發行所 朝香屋書店  
 東京市神田區鍛冶町二十二番地

印刷者 仁科衛  
 東京日本橋區藥研堀町三十三番地

印刷所 厚信舎  
 東京日本橋區藥研堀町三十三番地











